

釧路湿原自然再生協議会 再生普及小委員会
第3回湿原学習のための学校支援ワーキンググループ議事要旨

日時：2016年8月1日（月）14:00～16:00

場所：釧路地方合同庁舎 5階共用第1会議室

【出席者（敬称略・順不同）】

< 専門家 >

- ・高橋 忠一

< 学校教員 >

- ・鶴居村立鶴居小学校 中川 道高
- ・鶴居村立下幌呂小学校 柴田 康吉
- ・釧路市立大楽毛小学校 武市 太一郎
- ・釧路市立鶴野小学校 深瀬 秀幸
- ・釧路湖陵高校 渡辺 理実

< 学校教育行政機関等 >

- ・標茶町教育委員会 指導室 指導室長 佐々木 豊

< オブザーバー >

- ・長野県岡谷市立神明小学校（北海道教育大学釧路校研究生（長期派遣研修）） 大熊 望

< ワーキンググループ事務局 >

- ・環境省北海道地方環境事務所 釧路自然環境事務所
国立公園課 杉本 頼優
釧路湿原自然保護官事務所 寺内 聡
- ・公益財団法人北海道環境財団 久保田 学、山本 泰志、安田 智子

事務局 第3回湿原学習のための学校支援ワーキンググループ（以下「WG」という）を開催する。（配布資料確認後、新たに参加することとなった渡辺委員より自己紹介）以降の進行を高橋座長にお願いする。

議事1 ワーキンググループの取組み報告について

（以下、高橋座長による進行）

高橋座長 議事1について事務局から説明をお願いしたい。

事務局 資料1に基づき説明。

高橋座長 報告のあった学校の他にも問い合わせがあり、チラシの効果がみられているということであった。今後もこうした輪を広げながら、問い合わせや相談に対して出来るだけ積極的に対応していきたい。合わせて、実践の内容をフィールド情報マップに集約していくとともに、湿原で行われる行事情報やこれらの実践の内容を集約したメールニュースの配信を試行的に開始しているとのことであった。鶴居小学校の実践内容について、中川委員からご報告いただきたい。

中川委員 資料1別紙1に基づき実践内容を報告。

高橋座長 感想や質問を伺いたい。今回の実践報告にあった14名という生徒数はフィールド学習を行うにあたって規模としてはどうか。

中川委員 比較的やりやすい人数である。

深瀬委員 私の学級で38名の児童がいるが、学年で3クラスあり、4年生全体で約110名の児童数となる。この規模になると、大型のバスで移動することとなるが、今回報告のあったフィールドは中型バス以下でしか入れない場所であり、検討してみたが、このフィールドを活用することは難しいだろう。

高橋座長 出来れば街中の学校の生徒を優先して連れて行きたいところだが、そういった学校ほど規模が大きく、移動の問題もあり連れて行くことに課題がある。フィールド学習を行う上で、児童の人数規模は課題として挙げられる。

武市委員 私の学校でも同じ状況で、移動手段が課題である。このWGに参加している大きな理由は、元々東京で勤務していたが、釧路に来たからには湿原の教育をやっていかななくてはならない、自分もスキルアップしなければならないと思ったからである。個々の学校では限界もあり、移動の問題は行政に働きかけて全体として考えていくべきものと考えている。学校単位でバス会社に働きかけるのではなく、行政がバックアップして湿原の教育に力を入れてもらう働きかけをしていかなければ進展しないのではないかと感じている。そうした部分で良いアイデアがあればと思うが。

高橋座長 要望だけではなく、実現していくために必要な具体策を考えていく時期であろう。行政としても釧路湿原を題材とした教育が重要であるならば、資金的なことも含めた対応が必要になるだろう。

事務局 釧路市立中央小学校からも相談を頂き、釧路市生涯学習センター所有のバス利用を検討されたようだが、バスが確保出来なかったため、フィールド学習が中止となった。この学校は1クラスしかなく、釧路市の場合は、街中の小学校の方が児童数は少なく、市周辺部の学校の方が児童数は多いといった話を先生から受けた。児童数が1クラスであったとしても、移動の課題は大きいと実感した。

高橋座長 具体的な突破口が欲しいところであるが、標茶町ではどのような状況か。

佐々木委員 スクールバスを運行せざるを得ない市町村では、そのバスを学校行事等に転用するところも多い。標茶町でもバスの都合が付けばフィールドワークや行事に利用可能な状況にある。

高橋座長 スクールバスは各学校所有ではなく、町として所有、運行するのか。

佐々木委員 その通り。スクールバスを利用している学校に限らず、町内のどの学校でも調整して利用しているという状況にある。標茶町の場合には人数的にも小規模な学校も多く、そういう面では恵まれている。

高橋座長 学校や生徒に経済的な負担なくバスは利用できるのか。

佐々木委員 負担はない。釧路市とは状況は異なり、そういった部分では恵まれていると言えるが、普段 30 分から 40 分かけてバス通学しなければならない不便さの裏返しでもある。

高橋座長 標茶町ではスクールバスの仕組みが発達せざるおえない状況にあり、それを転用しているということか。

佐々木委員 そういうことである。

深瀬委員 私はバス会社と交渉し手配している。釧路市としてもマイクロバスでも持っていない限り無理だろう。バス会社も繁忙期は人員が割けず、配車出来ない状況にある。人数が多いので大型バスでの移動が必要だが、行きたい場所は道が狭いので、更に中型バス 1 台を手配し、現地で乗り換えてピストン移動をしてもらったりする。釧路町や鶴居村はそういう面では恵まれていると感じる。学校の規模、フィールドに入っていく道の状況等、物理的な問題があるので、利用できるバスがあれば一概に上手くいくとは限らない。

高橋座長 課題点が一つ明らかとなった。今後取り組まなければならない課題である。

柴田委員 私の小学校でも人数が少ないのでスクールバスで動けるが、逆に学校の規模が小さすぎてフィールド学習は学校全体で行うということにもなる。バスの課題はどうしても限界があり、学校規模や状況に合わせて大型バスでも入れるフィールドや、そのフィールドで学習できる内容が提示できると良い。例えば、流水による浸食を見ることができるところとしてインパクトが強い場所、そこまでではないが浸食を体感できる場所など、様々なレベルの場所、学習があっても良く、学校の状況に合わせて選択できる形であれば良い。

高橋座長 貴重なご意見を頂いた。いただいた意見を踏まえて検討していきたい。釧路湖陵高校の実践内容について、渡辺委員から説明いただきたい。

渡辺委員 資料 1 別紙 2 に基づき実践内容を説明。今年で SSH は 5 年目となり、来年度以降も採択を目指したい。今回実施するに至った経緯をご説明したい。昨年度までは北海道大学の坪田先生等のご協力を得て道東地域の哺乳類を中心とした野生動物をテーマに、羅臼でエゾシカの捕獲やヒグマとの共生についての学習、ホエールウォッチング等を行った。昨年度、釧路に赴任してきたが、前任校は羅臼高校で 6 年勤務した。知床の素晴らしさを学習に活かしたいと考えて実施したが、往復 7 時間の移動、宿泊、乗船費の負担があった。昨年度、環境教育部会の研修講座に参加して WG の取り組みを知り、事務局に連絡をとり連携して実施していくこととなった。安全管理や学習効果の面から、40 名が一度にフィールドには入ることは難しいということだったため、学生を 2 グループに分け、博物館での学習とフィールド学習を 2 日間にかけて行うこととした。今回の地域巡検プログラムへの参加を通して、自然を科学的に分析する技術を身に付け、関わりを試行する生徒が一人でも出てくると良い。良い経験ができることを期待したい。

高橋座長 感想や質問を伺いたい。

中川委員 釧路の子ども達が地域のことを学ぶのは大事な事であると思う。地域巡検実施後、

どのような展開を考えておられるかお聞かせいただきたい。

渡辺委員 午前中は湿原核心部の一つである赤沼の素晴らしい原生的な風景をみせ、午後は湿原が持つ問題を知ってもらい、何かを感じ取ってもらいたい。この研修は理数科の1年生が参加するが、その後の展開として、2年生では4人～5人のグループで研究課題に取り組む。その中の1～2グループには湿原をテーマとした研究をしてもらいたいと考えており、ライフワークにつながる仕掛けをしていきたい。

高橋座長 私たちは自然再生の再生普及行動計画を作っているが、そこに湿原と地域の暮らしをつなぐという項目がある。かつては対立の構図だったが両立をテーマに位置づけている。高校生の学術的関心を引き出し、タンチョウや農業、水産業などの話が差し迫った問題として生徒の前に現れてくると面白い。

議事2 これからの取組予定

高橋座長 議事2について事務局から説明をお願いしたい。

事務局 資料2に基づき説明。

高橋座長 今後、フィールド情報マップとして実施した授業の内容をWEBサイトで閲覧できるようにすること、引き続き、希望する先生にメールニュースを配信していくということであった。それぞれの学校でもホームページを持っていると思うが、学習の記録をそこで見ることはできるか。

深瀬委員 学年の取り組みであり、学校全体としての取り組みではないため、学校のホームページには掲載していない。

高橋座長 学校のホームページから興味を惹く事もあるので、そのように出来れば良いと思うが、釧路湖陵高校ではどうか。

渡辺委員 SSHの活動紹介としてブログ的に掲載している。

高橋座長 情報発信において、実際に相手に伝わっているかという検証は行われていないため、どのような形で情報を出していくことが相手の心に残るのかを考えていく必要がある。ここまで全体に関して質問等あればお願いしたい。

柴田委員 高校生の学習の実態が知りたい。2年生からはグループに分かれて研究課題に取り組むというご説明があったが、学生自身が専門家に連絡を取りフィールドで活動を行うというレベルまで行うことができるのか。

渡辺委員 能動的な学習が出来るグループとそうでないグループがある。ある程度教員がプログラムして上手くいっている今年度のグループを紹介すると、エゾシカにはダニが媒介する病気があるが、調査日は教員が設定し、学生自身が北海道大学の先生に連絡を取ってアドバイスを頂きながら病原体の分析等を進めている。また、春採湖をフィールドとするグループが今年2グループでき、博物館の学芸員に相談しながら研究を進めようという。

柴田委員 仕組みとして、学生が自身で専門家に連絡を取り、フィールド学習を設定するといった自由度は許されているということか。

渡辺委員 湿原での学習となると、そこまでの自由度は難しいかもしれないが、出来るだけ教員がコーディネートしてあげたいと考えている。

佐々木委員 標茶高校の高校生と関わることがよくあるが、高校生の発想と行動力は素晴らしいといつも感じている。今回の会議で、湿原に高校生が関わっていくという話を聞いて、先が見えてきたように感じた。小さな頃から自然と触れ合いながら徐々にそうした感性を作っていくということは正しいのだが、義務教育では新しいものが入りにくいところがどうして

もある。現在の教育長が若い頃、国の事業で草地化したのが自身の仕事だったという話を聞き、その時代の最先端の技術で農地にした歴史があり、現在それを最先端の技術を使って自然に戻そうとしている。これは教育の素材として価値があるが、小学校、中学校では拾いきれない。高校生がこうした部分に関わっていくこと、知床学のように理科や自然だけでなく、社会的なもの、道徳的なものを含めたパッケージとして湿原を考えていかななくてはならない。そうした部分での可能性を見据えた時、釧路湖陵高校がSSHとして関わることに期待を感じる。

武市委員 高校生が釧路の自然とどう関わりを持つかは大変興味がある。以前に標茶高校を訪問したが、衝撃的だった。釧路湖陵高校の生徒がどの様に感じ、どのように学んでいくか、非常に興味がある。また、鶴居小学校の実践報告の中で、参加した児童が環境省で働きたい、といった夢を持ってくれたことも、とても素晴らしいと感じた。

深瀬委員 このような学習をしていると将来そちらに進みたい、という子が必ず出てくる。学習の一つの目標にもなる。私が教えた子ども達は今高校一年生になる。フィールドとして赤沼も良いが、達古武湖のヒシも題材として良い。また、標茶高校の高校生が自身の軍馬山のフィールドで釧路湖陵高校の生徒を案内するなど、標茶高校と釧路湖陵高校の交流があると面白いと感じた。

高橋座長 十数年前に教育大学主催で湿原の自然体験を行ったことがある。学生の研究発表の場に標茶高校の生徒と釧路湖陵高校のクラブ活動が来て、高校生と大学生の区別無く合同で研究発表会を行った。小学校、中学校、高校、大学と学校としては区切りがあるが、人間としての学びの部分を見つめた時、こうした垣根は不要であろう。高校生でも興味がある学生は大学生と一緒に学んでも構わないし、大学の先生から専門的な話を聞く機会も持てる。そうした境目をまたいでいくことも考えていきたい。情報発信に関しても、義務教育は教育委員会に依頼するが、高校は道立なので釧路教育局に依頼する。理解不足なところもあり、少しずつ試行錯誤していきたくて考えている。前回の会議で、中学校の先生もいた方が良いという意見もあり、小学校、中学校、高校間で先生同士の意見交換が出来ると良いかもしれない。

中川委員 鶴居で生まれた子どもたちには湿原の良さを知り、その良さを伝える事が出来る、そんな子どもに育って欲しいと思う。釧路湖陵高校の生徒は湿原に関してどのくらいの知識があるのか。高校生は湿原に関してどこまでの経験、知識があるのか知りたい。

渡辺委員 今段階では、そうした情報は把握しておらず、今回の巡検の前後でアンケートを通して把握していきたい。小学校の先生にお聞きしたい。自身は釣りが好きで自然の中で遊んできたが、こうしたフィールド学習の機会がなくとも、原体験として自然の中で遊んできた児童はどのくらいいるのか。

柴田委員 サルルンガードという鶴を保護する子どもレンジャーの仕組みがある。全校児童が33人程、学年で平均6人程の人数規模の学校だが、各学級で2~3人はサルルンガードに入っている。父母が釣りやカヌーが好き、という生徒もいるので、かなりの割合が体験していると思う。

中川委員 私の学校でも同じ状況である。1クラス14人前後で、ほとんどの子どもたちが総合学習で湿原と関わってきているが、サルルンガードにもクラスの半分位の児童が参加している。子どもの夢を聞くと、自然に関わるものが多い。

高橋座長 街中にある学校では、どういった状況か。

深瀬委員 親が好きなら自然の中で遊んできた体験を持つであろうが、そうした体験をしてきた児童はほとんどいないだろう。子どもが湿原での歩くスキーを体験した後、お母さんを誘

い、その後お父さんを誘って家族でという子どももいることはいるが多くはない。

武市委員 私の学校では、深瀬委員の学校よりもそうした児童は少ないだろう。2年生でデジタルセンターを訪問し温根内木道を歩くが、感覚的には東京の子どもたちと同じ反応を示す。植物から何から全く知らず、ヤチマナコもヤチボウズも全く知らない。湿原の近くに住んでいても、都心の子どもと変わらない状況である。

高橋座長 子どもの感性の話として、田舎の子どもが自然に詳しい訳ではない。彼らの情報源はテレビや漫画本であったりするので、過信するとも言われる。子どもの感性から見ていく必要がある。

議事3 自由研究や学習成果発表の場の活性化について

高橋座長 議事3について事務局から説明をお願いしたい。

事務局 資料3に基づき説明。本WGでは、境委員の講座で研修されている大熊教諭にオブザーバーとして参加いただいている。学習成果発表の場づくりに関して、境委員と大熊教諭で検討いただいております。本日は、境委員が所用で欠席されているため、大熊教諭から説明いただく。

大熊教諭 パワーポイントファイルをプロジェクターに映写しながら、「釧路湿原サイエンスフェア」構想について説明。

高橋座長 子どもたちの自由研究や総合の学習成果の発表の場づくりを今年から試行的に作っていくということである。

事務局 今年度は試行的に1クラスでも良いのでやってみようという話をしていく。

佐々木委員 成果のとりまとめと審査の間には、児童が発表する場はあるのか。

大熊教諭 今年度は学校の中で行われる総合の学習成果発表等に参加させて頂くことを考えており、新しく場を設けて発表するという事は想定してない。

佐々木委員 審査基準は、取り組みの中身と発表の仕方のどちらか。

大熊教諭 どちらかという中身が重視される。発表技術についてはまだ話題にはなっていない。学校での学習発表の場に行かせて頂くことになるが、発表の仕方も含め、どのように子どもたちが問題に対して向き合ってきたのかを審査の対象になると思う。

佐々木委員 子どもの問題解決の学習活動において、問題に対して調べ観察し、分かった事をまとめる力と伝える力がある。このサイエンスフェアを授業に位置付ける中で、現場の先生はどのように受け止めるのかを考えていた。発表の方に気がいってしまうのではないかと感じた。先ほどのアラスカでの事例説明のように、審査員と面接形式で内容を精査していくのであれば、プレゼンは必要ないと思う。今、どのような審査、評価方法を構想しているのかお聞きしたい。

大熊教諭 今年度の評価基準をどうするかにもよるが、何年か取り組みを重ねていく中で発表する力、自信を持って発表する姿等も将来的には審査の基準に入ってくると思う。今年度、どのように評価基準を設けていくか検討が必要であろう。

高橋座長 アラスカで既に実施されている仕組みの中に、しっかりとした理論付けがあると思うが、それを釧路地域に合わせていくこと、つまり地域化することが必要となる。この地域では難しいこと、加えなければならない事等が実施していく中で見えてくる。それを蓄積していくことで「釧路型」に地域化されていくだろうが、少し時間が掛かるかもしれない。

大熊教諭 特に今年度は湿原をテーマとした学習に取り組んでいるクラスを中心に自由研究、学習成果の発表の場をと考えているが、今後何年も重ねて増えていく中で「釧路型」ができ

ると良い。

武市委員 サイエンスフェアをひとつのきっかけとして、そういった学習に取り組んでいないクラスが、取り組んでみるということもあるだろう。発表の仕方という意味では非常に興味があり、例えば、ワークショップ形式の審査会として、児童が発表している中を審査員が渡り歩き、制作した児童も他の発表を見に行くといった交流が持てると良い。

渡邊委員 私は別海の出身で子どもの頃は町内発表会があり学校代表として発表し、そうした経験が今の自分につながっている。それがあったから、自然について学ぶきっかけとなり、まとめる力、発表する力も身についたのだと思う。新たに立ち上げるのは大変だが、こうした学習が小学校から高校まで続いていくと、つながりを意識したプログラムになり素晴らしいものになるだろう。

高橋座長 上位大会がある自由研究発表会を実際に経験された先生の意見をお聞きすると、こうしたシステムは重要なきっかけを提供する事が出来ているのかもしれない。

大熊教諭 長野県では教育会という組織が地域毎にあり、夏休みの自由研究は教育会で審査会を行う仕組みがあるが、そういったものは釧路ではないのか。

柴田委員 学校に専門家が訪問する時のスタンスが重要になる。最終的には上位大会があり、それを目指すスタンスで学習や発表がクラスの中で位置づけられていれば大丈夫だろうが、それが無い段階で学校に学習成果の評価を行いたいと持ち込んでも受け入れられないであろう。評価ありきではなく、総合学習の発表会等に専門家が来てくれたという感覚で、今まで頑張ってきたことを専門家が評価してくれるというスタンスが良いだろう。自由研究等で子どもたちにコンペの動機付けがされていないと、ある程度浸透してからでないといけないだろう。それよりは、総合の発表の場を使った方が子どもたちと専門家の交流の場を作りやすい印象を持った。

高橋座長 授業の一環として行われる発表会に、外部の専門家などが参加する一歩踏み出した発想で、勇気が要るかもしれないがやってみる価値はあると感じた。今回初めて提案頂いたが、湿原というテーマを掲げることで、これまでとは異なる展開となるかもしれない。議論が付きませんが、時間となったので、本日はここまでとしたい。進行を事務局にお戻しする。

その他

事務局 次回 WG は冬休み期間での開催を予定している。9月4日開催予定の達古武湖での研修会の詳細はメールニュース等でご案内する。メールニュースは、委員以外の先生にもお送りしており、関心がある先生がいれば案内いただきたい。茅沼地区旧川復元見学会を案内した。これで第2回湿原学習のための学校支援 WG を終了する。

開会